# 瀬田の丘

創刊 1973 年
編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

今日のみことば
年間第 31 主日　B 年（2024 年 11 月 3 日）

瀬田教会主任司祭　小西広志神父

第一朗読：申命記　6 章 2 ― 6 節
第二朗読：ヘブライ人への手紙　7 章 23 ― 28 節
福音朗読：マルコによる福音書　12 章 28b ― 34 節

福音朗読でエルサレムに到着されたイエスさまは、ユダヤ教の指導者たちと論争を繰り広げます。そのことが『マルコによる福音書』12 章には数多く記されています。今日の福音朗読の箇所は、一連の論争の最後にあたるものです。

28 節の「律法学者」ですが、ギリシア語ではグラムマテウスと言います。これは「書く」を表すグラッフォという動詞と関連する単語です。高級な役人としての「書記官」を意味する場合もありますし、「学者」を意味する場合もありますが、新約聖書でのほとんどの用例は律法の専門家である「律法学者」を指しています。

律法学者は律法を研究し、その解釈を教えます。そして何よりも、人々の日常の振る舞いが律法にかなっているかどうかを判断しました。ですので、律法学者とは、聖書の専門家であり（マタ 2 章 4 節参照）、私設裁判官のような存在でした（マコ 7 章 1 節参照）。

彼らは「ラビ」と呼ばれていました。とても地位の高い存在だったのです。実はイエスさまも「ラビ」と呼ばれていますので、律法の専門家だったと言えるでしょう。今日の福音朗読で面白いのは、イエスさまが律法学者の正しさを認めている点です（34 節参照）。その一方で、イエスさまは律法学者たちを「律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実をないがしろにしている」（マタ 23 章 23 節）と徹底的に批判もしています。

33 節の：「隣人を自分のように愛する」とはどのような意味なのでしょうか。
愛は神へと向けられ、同じように隣人へと向けられていきます。では、自分自身を愛することはどうなのでしょうか。二つの点から理解できるかもしれません。

一つは、隣人を正しく愛するためには、まず自分自身を正しく愛さねばならないという考え方です。「あなたが自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい」の意味でとらえることができます。「愛する」がピンとこなければ「大切にする」と言いかえてもよいでしょう。「あなたが自分自身を大切にするように、隣人も同じように大切にしなさい」という解釈です。自己愛に優先権をもたせている考えです

もう一つは隣人愛だけが大切なのであって、自分自身を愛することは命じられていないという解釈です。「自分のように」の「自分」とは、自己愛に振り回され、翻弄されている人々の「自分」を指します。人は自分を熱心に大切にし、愛します。自分自身を大切にするあまり、自分自身には寛大であり、寛容です。自分がかわいいから（自分ファーストですから）、自分のためだったら大きな時間を割きますし、自分の幸せのためだったら努力を惜しみません。こんな自分を愛している人々と同じような仕方で隣人を愛しなさいという解釈です。ここでは自己愛は命じられてはいません。ただ、自分自身に向ける自己愛の熱心さをもって隣人を愛しなさいという解釈になります。

以上のように「隣人を自分のように愛する」には、二つの解釈の可能性があるということですが、このようなとらえ方は細部にこだわりすぎている感があります。それこそ「律法学者」のようです。イエスさまの教えの大切な点は、神さまを愛し、神さまに仕え、隣人を愛し、隣人に仕えるという生活にあるのです。

【ちょっとひと言】

今日の福音を「神と隣人とを愛さなければならない」と理解してはならないでしょう。それは道徳です。聖書は道徳を説いているのではありません。生きる決断を読者に迫っているのです。福音は道徳ではありません。生き方についてのイエスさまからの招きです。導きです。

朗読にはありませんが、今日の第一朗読の直前の箇所のあたりをもう少し見てみると、「一体誰が火の中から語りかけられる、生ける神の御声を我々と同じように聞いて、なお生き続けているでしょうか」（5 章 26 節）とあります。惨めな民でありながらも、イスラエルの民はモーセを通じて神さまと出会い、神さまと交わったのです。そして神さまの言葉を聞いてもなお、生きているという「いのち」の実感を得たのです。ですから、モーセを通じて語られる神さまの言葉を実行します、と決断します(27 節参照)。

生きているという「いのち」の実感が神への感謝と賛美を呼び起こします。その結果、掟を守るという生き方へと結びついて行きます。

福音書でイエスさまは、「あなたは、神の国から遠くない」とおっしゃいます。律法学者の三つの掟を示した解釈、理解は、彼に救いをもたらしたでしょう。神を愛し、隣人を愛する。言いかえれば神に仕え、隣人に仕える生き方は、救いを約束してくださったイエスさまへの感謝と賛美の動機から生まれる必要があるのです。